痛み・しびれの弁証の基礎

筋肉痛 —— 経絡阻滞

脾は肌肉（筋肉）を主る
肝は筋（すじ）つまり筋膜・腱を主る

気虚 —— 疲れると筋肉痛を起こす
陽虚 —— 冷えると筋肉痛を起こす
陰虚 —— 体が熱くなると筋肉痛を起こす
湿邪 —— 雨などで筋肉痛を起こす

しびれ ← 失養（気の不足） ← 気虚
← 瘀血

痛みは、気血の阻滞 ← 気虚、気滞
← 瘀血
経絡阻滞 ← 寒、陽虚
← 痰湿
← 陰虚虚熱
← 実熱

正座ができない
首や肩こり

} 経絡阻滞

白芍：{ 平肝肝鬱 柔肝止痛 補血斂陰
赤芍：{ 清熱涼血 去瘀止痛

平肝熄風藥 ↗ 舌出しにくい人
抑肝散（補血活血 健脾利水）
釣藤散（清热 健脾益気）

・交感神経亢進（熱結まり）
・四逆散
ただし投薬で使ゆるんだときはへらす。
舌の出し方がまじめ 位置に注う。
加味逍遥散
・舌をとがらせる
・下痢にはう

痹証

「痹」とは「塞がる」「通じない」の意

痹証とは、皮膚、肌肉、血脈、関節のしびれ、重だるさ、痛みや、甚だしいと関節の発赤腫脹、灼熱感などの症状を主証とする病証である。

痹の原因が経絡にあるとき、その現れる症状の特徴から分類する

※　黄帝内経・素問の痹論では、「風・寒・湿の三気が混じりあって痹となる」とある。

風邪→ 行痹
寒邪→ 痛痺
湿邪→ 着痺

※　呉鞠通「痹証は寒による者多しといえども、熱を兼ねる者も少なからず」と指摘。

風熱邪・湿熱邪・熱邪
風・寒・湿の邪が体内で遷延して化熱 } → 熱痹
陰虚虚熱・鬱熱のある人は、邪の侵入後、化熱しやすい

右手のじんじんする痛み

① 阻滞（外傷や手術なら瘀血：多い）

桂枝茯苓丸 6g-7.5g＋田七 1g-3g＋芍薬甘草湯＋地竜 3g　＋附子 1g-2g-3g-4g

防己黄耆湯

疎経活血湯

② 失養（陰や血の不足：少ない）

痹証・痹病とは、体の正気不足、衛外不固、風・寒・湿・熱などの外邪の侵入によって経絡が痺阻され、気血の運行が阻滞し、肌肉（筋肉）・筋骨（筋膜・腱）・関節に疼痛・けだるい・しびれ・灼熱・屈伸できないなどの症状が現れ、甚だしいと関節の変形をきたす。

四肢関節の疼痛の弁証の要点

実証	虚証
急性病 痛みが強い 脈実有力	病歴が長い じわじわと締め付ける痛み・弱い痛み 脈虚無力

1　行痹（風痹）

四肢、体幹の筋肉や腕・腰・肘・膝・足関節などの大関節の遊走性疼痛。運動障害、悪寒発熱、舌白滑、脈浮緩。

「肘の上が痛んだかと思うと次は下が、次は反対の腕が痛む」

風と寒湿が一緒になり陰陽共に病む。痹証による阻滞が長く続くと関節は気血の栄養を受けられず円滑な運動機能が障害される。悪寒発熱は風寒邪の侵入で営衛が阻閉したためである。舌白滑は風湿の侵入で内湿が生じた。脈浮緩は風湿が表にある。

2　痛痹（寒痹）

固定した関節の激しい疼痛で、屈伸によって痛みが増悪する。関節に冷感があり、暖めると痛みは和らぐ。舌白、脈沈緊 or 弦緊。寒の性は収引凝滞で気血を阻閉させるので、その痛みは激しく、痛みの部位は固定している。気血が何らかの原因で関節を通過しにくくなると関節は痛み、屈伸できなくなる。寒が凝滞し陽気がめぐらないため関節は冷えて痛む。熱を得れば気血が通るようになり痛みは減少する。

3　着痹（湿痹）

関節が面だるく固定性の痛み、低気圧の接近により悪化し、ひどいときは腰・肩が冷えて重く、足が腫れ、舌苔は白膩、脈は沈緩。湿は陰邪に属し、その性は重着・沈滞である。したがって湿痹では関節が重だるく痛む。雨天では重だるい痛みが激しくなり固定性である。腰背は督脈が上下に運行する通路にあり、寒湿が内に着くと腰や脊柱が冷えて重くなる。寒湿が下注すると足が腫れる。舌苔の白膩、脈の沈緩は湿邪が内に入り脾陽が運行しないことを表している。

4　熱痹

関節が痛み、灼熱して赤く腫れ、屈伸不能、冷やすと痛みが減少、発熱・口渇・心煩・小便黄熱・舌乾燥・苔黄・脈滑数。湿熱が蓄結してその熱毒が関節を塞ぐので、冷やすと痛みは和らぐ。皮膚表面から湿熱が侵入すると、営衛不和で悪風発熱する。熱邪が傷津しかつ津液の上昇を阻むので、口渇・胸中苦悶・舌は乾燥・苔黄となる。湿熱邪が三焦の水道を塞ぐと、小便黄となる。脈滑数は、湿熱上擾を意味する。

痹証

「痹」とは「塞がる」「通じない」の意

痹証とは、皮膚、肌肉、血脈、関節のしびれ、重だるさ、痛みや、甚だしいと関節の発赤腫脹、灼熱感などの症状を主証とする病証である。

痹の原因が経絡にあるとき、その現れる症状の特徴から分類する

※　黄帝内経・素問の痹論では、「風・寒・湿の三気が混じりあって痹となる」とある。

風邪→ 行痹
寒邪→ 痛痺
湿邪→ 着痺

※　呉鞠通「痹証は寒による者多しといえども、熱を兼ねる者も少なからず」と指摘。

風熱邪・湿熱邪・熱邪
風・寒・湿の邪が体内で遷延して化熱
陰虚虚熱・鬱熱のある人は、邪の侵入後、化熱しやすい
→ 熱痹

病位の深さ、病変部位から分類する

皮痹：邪が皮毛にあって、痛みはなく、しびれるか、かゆいか虫が這うように感じる。

痛痹が治らず風寒に重感し皮膚がしびれるものは、外邪が阻滞して陽気が外達することができない状態。**黄耆益気湯**を用いる。(＝補中益気湯去大棗・乾姜加紅花・黄柏)

肌痹：四肢が萎えて弱り、しびれて自由がきかない。

着痹が長びき営衛ともに虚した状態のときに風湿に重感して、筋肉がしびれ、感覚がなくなり四肢が軟弱になったものは、肌痹であり、**神効黄耆湯**「李東垣方」人参・黄耆・白朮・陳皮・蔓荊子で補脾気去風勝湿する。

脈痹：筋肉が極めて熱くなり、皮膚の上を虫が走るように感じ、口角が裂け、皮膚が黒く表面が火のように熱い。

熱痹が長びき湿熱に重感して皮膚が黒く表面が火のように熱い者は、脈痹になっているので、**桂芎四物湯**で活血通絡する。(＝桂芎・川芎・白芍・当帰・生地黄・薏苡仁・蚕沙) 熱が依然として下がらず痛みが激しくなる者は麝香・犀角を加えて清熱解毒する。

筋痹：風湿の邪気と血気が相打ち関節に集まり、筋肉が弛緩したり発赤したり腫脹したりする。

行痹が長びき、さらに風湿に侵され関節がひどく痛み屈伸が不自由な者は、風湿が深く筋にまで入り、関節が拘攣（筋肉の異常緊張）して屈伸不能の筋痹となる。**芍薬甘草附子湯**を用いる。

骨痹：四肢が攣急して関節に浮腫が生じる。病は骨にあり手足が挙がらない。

痛痹が長びき、関節が冷えて拘攣する者は、気虚血寒で、寒湿に重感した骨痹であり、散寒止痛・活絡の**小活絡丹**を用いる。(＝川烏・草烏・天南星・乳香・没薬・地竜)

痺証の弁証と用薬

1. 病位

上肢：頸、肩、背、腕、手　：羌活、桂枝、防風、姜黄で去風湿

下肢：腰、股、膝、踝、足趾　：独活、蔓荊子、木瓜、防己で去風湿、補肝腎

一身：独活＋羌活

頸背痛：羌活勝湿湯，葛根湯

肝腎不足が甚だしく腰膝背痛：独活桑寄生湯

寒湿脾痛：苓姜朮甘湯

表面上の風寒湿：麻杏薏甘湯 ⇒ 一身痛(しびれ)発熱，多方に激しいのを風湿と名づく。

風湿が盛んになって経気を阻滞して全身痛か
湿邪が陽気を郁して
外界の陽気が盛になる十分から陽証・熱証。

風湿在表による全身痛で多方に熱感がある，
この病は汗がなく風に当たってなる。あるいは，暑く冷を取ってなる。

- 麻黄，杏仁で宣肺去風
- 薏苡仁，炙甘草で健脾去湿

温服して微汗かくと風湿の邪を除くことができる。

- 麻黄湯から発汗通陽の桂枝を抜き，服用量を少ないので
- 麻黄加朮湯（麻黄9 白朮9 桂枝6 杏仁9 炙甘草3）

寒湿の邪が鬱表して経気を阻滞し，強い身体痛，無汗（有汗に用いない）
辛散発汗の麻黄湯に健脾去湿の白朮を加え，発散を抑制し，
去湿を強め，麻黄量を少なくし，「少しの汗」をかかせることで寒湿を除く。

羌活勝湿湯　羌活・独活各9，防風，藁本，川芎，蔓荊子，各6，甘草3

寒湿在表，発表去湿：腰背重だるく痛み，頭痛，頭重，全身痛で転側できない。
（肌表の風湿は麻表発汗する）悪寒，軽い熱寒，脈浮（風）苔白（湿）

寒湿強く腰重い：酒洗防己2g，軽症には附子2g，重症には川烏2g を加える。

羌活：去風湿，太陽経に入り上部の解表散寒
独活：去風湿，散風解表，下部，肝・腎・膀胱
防風，藁本：太陽経の去風湿（頭痛）
川芎：疏肝活血，去風止痛，行気（肝胆也）

利関節
下焦と腰背の間の風寒湿邪を除く。

独活桑寄生湯　独活9，桑寄生，杜仲，牛膝，細辛，秦艽，茯苓，肉桂，防風，川芎，当帰，白芍，熟地，黄耆 20〜40，甘草各6.

去風湿，止痛，補肝腎，補気血。

（風寒湿邪が長に乗じて，長期にわたり経絡，筋骨に停着して肝腎不足，気血両虚を伴った状態である）

痹証日久，肝腎不足，気血両虚。
腰膝が冷えて痛む，下肢がだるく無力，関節が屈伸しにくい，しびれや知覚麻痺，寒冷を嫌う，舌淡苔白，脈細弱。

細辛：陰経の風寒を発散と筋骨の風湿を搜剔して止痛
防風：去風勝湿
秦艽：去風湿・舒筋
桑寄生・杜仲・牛膝は主薬補助，補肝腎，去風湿。
当帰，白芍，熟地は養血
人参（黄耆），茯苓，甘草は補気健脾
川芎，肉桂は血脈温通し下元を温補。

- 正気虚少なければ地黄，人参，黄耆減量
- 激痛には烏頭，白花蛇，地龍，紅花で搜風通絡，活血止痛
- 寒には附子
- 湿重ければ防己

（治験）47才女 1996年1月20日 初診， 风寒湿痹

患者は半年前に雨中の労働后から，頸部に強い痛みが生じて両肩関節痛もあり薬で緩解した。しかし冬に入ると，頸，肩の疼痛が日毎にひどくなり，頸は右を見たり左を見たりできない，両上肢を軽に挙上できない．寒にあうと重くなる．局部不紅，舌薄白，脈濡緊。

风寒湿痹
去风散寒、除湿和营
処方：葛根湯加減

葛根15 羌活15 麻黄6 桂枝10 白芍10 当帰15 防风12 苍术12，

15日分服用し，疼痛明らかに軽減し，頸も自由になる。
両上肢の外展上挙でやや斉に痛みがある，さらに10日分続けて治癒．

2、寒热

- 感邪の性質と患者の体質によって寒痹，热痹のいずれかになるのが決まる。
- 素体陰虚の陽が盛んな者は，多くは化热して热証
  湿热の邪が経絡関節に留まれば"热証 → 热痹となる。
  风寒湿痹が日久しく留まれば，病して化热
- 风寒湿邪を受けた素体陽虚陰盛の者は，多くは寒証→寒痹となる。
- 热痹の治療 ① 関節紅腫热痛明らか ← 白虎加桂枝湯（気分热盛）
  石膏15-60 50 知母18 甘草6 粳米9 桂枝10（辛寒清热・和营通絡）
  ② 関節紅腫热痛少し ← 桂枝白芍知母湯

- 寒痹の治療 ←◎ 甘草附子湯 （温陽散寒、去风除湿）
  附子、白术、桂枝、甘草各10、 风寒湿痹
  里の寒をとる　表の风をとる

- 风盛：麻黄加术湯
  湿盛：薏苡仁20 木瓜15
  寒盛：附子10～20，肉桂10
  气血不足：党参20 黄耆50 当帰20

肝腎亏虚：続断、桑寄生、狗脊、杜仲各15
上肢痛甚：羌活、姜黄、桑枝各10
下肢痛甚：牛膝15 鶏血藤25
関節腫脹：薏苡、木瓜各15
疼痛　：三七粉5，乳香、没薬各10．

3、気血

・痹証は、肝腎気血不足で経絡空虚となり、その虚に乗じて風寒湿邪の侵襲に至る。

(1) 痹証日久しく愈えず、気血運行が長びき、瘀血痰浊が経絡阻滞し、関節腫大、関節周囲結節、屈伸不利となる

(2) 病久しく気血亏耗、気血亏虚の症状出現する。 ← 夯风寒湿 益气和血

(治験) 28才女、1998年1月10日初診。

患者は2ヶ月前に産后、湿冷布で5本を洗い、その翌日から全身関節痛がおこり、とくに両肩関節が甚しい。中西薬治療も効果なし。私の診察に来て、最近症状は強くなり、全身関節がおちこち痛む。畏风寒、夜間いたく痛みで目が覚める。苔薄白、脉弦細。

风寒湿痹

処方：防风15 桂枝12 黄耆30 当帰12 葛根15 秦艽15 羌活15 独活15 白术12 甘草10

1ヶ月服用して全身関節痛すでに消失し、活動自在、諸症治愈。

痹証と針薬治療　吳長欣（江西中医学）

1. 行痹は風寒湿痹中の風邪によるが、臨床的には、肢体関節痛、遊走し不定が特徴で、その病位は比較的浅く病変の多くは絡に見られる。これが理由で吳長欣は"交経縫刺、浮絡遠行"の法を用いる。

（症例）右肩関節の遊走性疼痛10日間。
風寒の邪を受けて出現。日ごとに痛みは加重し、治らず紹介され来院
左足の足三里、陽陵泉の敏感な点に針をし、浮法で行なうと
疼痛は軽減し、5回で治癒する。

2. 痛痹は、寒邪により、痛みは激烈で、痛む所は比較的固定しているが、
吳長欣は、局部に針を同時に行う。開四関（両側の合谷、太冲）に
寒凝の痛痹に発揮するが、上肢には浮合谷、補太冲、
下肢には浮太冲、補合谷でよい。

（症例）左腰腿の放射性激痛が1ヶ月になる。刀でかられたように痛む、
活動制限があり、夜間の疼痛は特に強い。ねむり良は妨られない。
はじめは、寒邪を受けてなり、多方面の診治を受けたが未だに治らず。
大腸俞、環跳、陽陵泉、承山、昆仑の圧痛の所に針を3回したが、
全く効果がない。そこで開四関（補合谷、浮太冲）を1回すると
軽減し、3回して治癒した。前后計6回の針で再発もない。

・川芎は痺病の偏風治療には不可欠の一薬である。

川芎は"血中の気薬"であり、行血通経作用だけでなく去風作用もある
すなわち疼痛が游走し不定の偏風の痺病を治す。

・雷公藤について李氏は、筋肉、筋脈の疼痛の緩解効果があり、
さらに骨関節の疼痛には優れている。
頑痺や関節拘縮変形に対して去風薬が必要である
李先生は蜈蚣一条あるいは烏梢蛇一条、頭部と外皮
を除いて、泡制后、粉末にして加えるとすばらしい効果がある

李氏を改変 → ・部位別引経薬は痺病に非常に効果が大きい。

- 上肢疼痛　姜黄、桂枝、桑枝、威霊仙、羌活
- 下肢疼痛　独活、牛膝、木瓜、五加皮、防己
- 腰背疼痛　続断、杜仲、狗脊、功労葉、枸杞子
- 骨節疼痛　威霊仙、補骨脂
- 筋肉疼痛　雷公藤（関節周囲組織酸痛不適時）
- 肩疼痛　防風、姜黄
- 四肢疼痛　姜活、独活、防風、姜黄
- 足跟疼痛　白芍重用、肉蓯蓉、補骨脂
- 肢体麻木　天麻、黄耆、天南星、鶏血藤
- 麻木のない気虚　黄耆
- 関節強直奇形　鹿角膠、骨碎補、全蝎
- 皮下紅斑　生地黄、牡丹皮
- 皮膚瘀斑、関節周囲結節　活血薬

・腰脚の上肢背部に
全蝎
露蜂房
・腰脚以下の人病
蜈蚣
穿山甲

骨碎補 9-15
苦、温
肝腎
① 補腎
・腎虚腰痛
＋補骨脂、牛膝、肉苁蓉
腎虚陽浮（耳鳴 目眩 歯痛 歯脱 歯の動揺）
＋熟地、山茱萸、枸杞、牡蛎
・腎虚慢性下病
＋山薬、補骨脂
② 活血続筋
打撲外傷
切創、骨折
＋自然銅、没薬（外用）

- 気虚　黄耆、党参
- 血虚　当帰、鶏血藤、大血藤
- 陰虚　桑寄生、枸杞子
- 陽虚　仙茅、補骨脂 … 香附（解鬱）、没薬（肝）、泥蘭（肝脾胃）

理気解鬱、調経止痛
散瘀止痛、消腫生肌
活血去瘀、利水通淋 防己

・痰瘀交阻（＋活血）莪朮、蘇木　（＋化痰湿）天南星 僵蚕 白芥子
・痺証後期に痰湿的瘀血凝滞　痛甚い　全蝎　蜈蚣　研末香服
・古等晴、痺更瘀証　，主別出或は烏梢蛇30g前后一
温和、寒、小毒、肝の破血逐瘀、消癥
の後前稀首
白花蛇舌草（＋＋苦性大10g以下、苦甘寒　肝脾胃大腸小腸肺
①清熱解毒 散瘀消腫 ④利水通淋

风寒湿痹の治療

1. 行痹

主症状：肢体関節の酸痛，遊走不定，関節屈伸不利，
初期には常に発熱，悪寒，苔薄白，脈浮など表証がある

症状分析：関節痛，屈伸不利は，风寒湿痹の共通症状，
行痹は风邪偏勝，风性善行而数変，
如えば関節遊走痛 時に上肢に出現し，時に下肢に出現
悪寒発熱，苔白，脈浮は，邪在外侵，外邪束表，営衛失和，

治則：去风通絡，散寒除湿，

方薬：防风湯加減

- 防风，麻黄で去风散寒
- 当帰，秦艽，桂枝，葛根で活血通絡，解肌止痛，治療効
- 茯苓で健脾渗湿，
- 姜，枣，甘草で和中調営，

- 肩，肘など上肢関節の酸痛には，羌活，白芷，威灵仙，姜黄，川芎，桂枝などで去风通絡止痛する，
- 膝，踝など下肢関節の酸痛には，独活，牛膝，防己，草薢などで通経活絡，去湿止痛する。
- 腰背関節の酸痛には，多くは腎気不足と関係があるので杜仲，桑寄生，淫羊藿，巴戟天，続断などで温補腎する。
- もし関節腫大，苔薄黄であれば邪の化熱があるので寒熱併用に桂枝芍薬知母湯加減を用いる。

胸脇痛には，柴胡，郁金，青皮，陳皮

高熱には桂枝

痛熱には黄柏

[illegible]は[illegible]

[illegible]には防风，麻黄

[redacted]

辛热，紅治中の寒湿を除く

祛风散寒 温経通阻

防风 6　川乌 3　薏苡仁 30　滲湿，健脾，除痹

蒼朮 6　草乌 3　当帰 9　補血，活血止痛

桂枝 6　忍冬藤 9　祛风通絡

行痹：藤丸，威灵仙　羌活

痛痹：細辛　蜈蚣　干姜　附子

着痹：木瓜　防己

热痹：去当帰，川乌，加石膏，知母　桑枝　忍冬藤

<加減>

全軸節痛：羌活 10

腰脊痛：桑寄生 30，炒杜仲 15

上肢　：桂枝 10，桑枝 30

下肢　：木瓜 15，牛膝 10

麻痛　：乳香 10，没藥 10，桃仁 6，紅花 6

気血虚弱：黄耆 15，熟地黄 30

2. 痛痺

主症状：肢体関節疼痛激烈、固定痛、寒に遇うと増悪し熱に遇うと緩解。
関節屈伸不利、局部の冷感、苔白、脈弦緊。

治則：散寒止痛、去風除湿

方薬：**烏頭湯加減**（温経散寒 通絡止痛）

- 川烏頭、麻黄は温経散寒、除湿止痛。
- 芍薬、甘草は緩急止痛。
- 黄耆は益気固表、利血通痺。

烏麻辛桂姜湯加減 烏附麻辛桂姜湯

- 川烏、附子、干姜は温経散寒止痛。
- 麻黄、細辛、桂枝は散寒疏風除湿
- 甘草は諸薬調和。

寒痺（寒湿の邪 盛人）

川烏9 麻黄5
地龍、黄耆 当帰、木瓜各10
白芍、牛膝 各15
炙甘草5

温経散寒、通絡止痛
2週間で17kg

寒湿互結

烏頭12（先煎）
麻黄10
黄耆15
白芍30
炙甘草9
蜂蜜30g（養血 止痛）
全虫6
皂莢2条

発熱、悪寒の表証には
附風湯の防己黄耆湯

* 偏痛には 五灸脂 蘇木 地龍 乳香 没薬

上肢痛には 羌活 川芎 威靈仙

下肢痛には 独活、牛膝 木瓜10

腰背痛には 続断、杜仲、狗脊

表寒が重いには 蘇葉、荊芥

兼湿には 蒼朮、白朮、茯苓、生姜

3. 着痹（著痹）

主症状：関節肉部 沈重酸脹、疼痛、甚則関節腫脹、活動不便。
苔白膩、脈濡緩。

症状分析：風寒湿邪を受け、とりわけ湿邪が偏盛。
湿の性質は重濁、粘滞なので、固定部位の痛み、
麻木は重い、腫脹。
湿は筋肉に留滞し、関節を阻滞させるので、強く活動不便。
苔白膩、脈濡緩は湿邪偏盛の象。

治則：除湿通絡、去風散寒。

方薬：薏苡仁湯

- 薏苡仁、蒼朮は健脾除湿。
- 羌活、独活、防風は去風勝湿。
- 川烏、麻黄、桂枝は温経散寒除湿。
- 当帰、川芎は養血活血。
- 生姜、甘草は健脾和中

加減
- 痰多には、天南星、橘紅　　・有熱には黄柏、石膏
- 関節腫脹には、草薢、木通、萆薢で利水通絡。
- 肌肤不仁には、海桐皮、豨莶草で去風通絡。
- 下肢病甚しいには牛膝。

風寒湿の偏盛不明において：蠲痹湯（風寒湿痹用）

- 羌活、独活、海風藤、秦艽、桂枝で去風除湿散寒。
- 当帰、川芎、乳香、木香、桑枝、甘草で活血通絡止痛。
- 風勝には、防風、白芷、
  寒勝には、附子、川烏、細辛、
  湿勝には、防己、草薢、萆薢仁。

程氏蠲痹湯
着痹（足跟痛）
（独活、秦艽、当帰 各12
桂枝10、甘草6、桑枝15
乳香、川芎 各9、木香 各7
海風藤 [illegible]）
出典：通絡止痛 [illegible]
最速の走りと内は脹脹 [illegible]
知覚異常の所を用く。
全体は前からの湿を追い去風 [illegible]

蠲痹安胎湯（妊娠中重症坐骨神経痛）
当帰、川芎 各8.5、熟地、[illegible]、海風藤、
川椒皮、独活、地龍 [illegible] 各12、秦艽20
防風、甘草10　＜風湿痹＞
＊腰酸に続断、[illegible] 各12、没痛に桂枝6
肢体屈伸不利や痛に木瓜、伸筋草、鶏血藤12
関節熱に黄柏12、苍朮10
＊補気血、補腎肝、去風除湿通絡
1日分3で10日を限度とする

[illegible]
[illegible]、黄芩15、姜黄12
[illegible]、赤芍12、防風8
[illegible]、葛根30、鶏血藤30
[illegible]、淫羊藿15

羌活：防風、祛風散寒
鶏血藤：養血通絡止痛
[illegible]：化瘀舒筋止痛
川芎、姜黄：活血去瘀
所所血滞瘀滞改善
黄芩：清熱
淫羊藿：補腎仁陽
葛根：解肌、通督脈痛を治す